肺外科

肺外科

江崎誠致

筑摩書房版

肺外科

昭和三十二年六月十日　発行

定価二〇〇円

著者　江崎誠致

発行者　東京都千代田区神田小川町二ノ八　古田晁

印刷者　東京都千代田区飯田町一ノ二三　中内佐光

発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九局七六五一（代表）
振替東京一六五七六八番

曉印刷・藤田製本

肺外科

裝幀　吉村二三生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

一

玄関のホールから奥の廊下へ通ずる窓ぎわに、長細い箱を立てたような白木の台があって、その上に置かれた琺瑯引の洗面器の中で、乳紫色の液体が、中心に向ってちぢまる波紋を幽かに立てた。

〈毒液〉

と書いた紙が、台の中央に貼りつけてある。信平は思わず動悸をおぼえ、その、何ひとつものの影を映さない淡濁した色を見つめた。なにも、手術を受けに来た病院の入口に、毒液がそなえつけてあるなどと思ったわけではない。それは、〈消〉という字の部分が破れてなくなったものであることぐらいは、考えるまでもなかったが、不意を衝かれたときにおちいる、あの意味のない不安と怯えが、このとき信平の胸を領した。あるいは、八ヵ月寝たきりだった体で、真夏の日中を二時間近く電車とバスにゆられて来たため、亢進していた心臓の鼓動が、〈毒液〉の発見に

よって自覚されたという現象であったのかも知れない。

信平は付添って来た友人の木村と、ホールの正面に置かれた黄色いレザーのソファに腰をおろして、病室へ案内してくれる看護婦の出現を待った。「ちょっと、お待ち下さい。」と、いかにも十秒も待てばよいような口ぶりで駆けこんでいった受付の娘は、どこへ行ったのか、それなり戻って来なかった。〈毒液〉の横の柱に、〈安静時間中〉という木札がかけてある。信平は、多分、その安静時間が終るまで待たされるのであろうと観念して、目を閉じた。

遠くから、蟬しぐれの声が潮騒のようによせて来る。あたりには、人っ子一人うごく気配がなかった。森閑として、物音らしい物音もないホールの一隅にただ黙然と坐していると、この奥に病棟があって、そこでは大勢の人がはげしい生活を営んでいるであろうということも、まるで実感のないものとしてしか受けとれなかった。蟻塚の入口に立ったとき、蟻はきっとこのような感懐をもよおすのではなかろうかと、信平は奇妙なことを考えたりした。

柱時計が、おそろしくものぐさな音を立てて、三時をうった。まだ、その余韻が消えぬうちに、いきなりホールの中程までとび出して来たものがある。おかっぱ頭に白い蝶型の制帽をつけた、少年のような看護婦だった。

「あ、あんた？」

それが、信平であることを確めた言葉だった。彼女は、ちょっと肩を持ちあげる西洋人の仕ぐさをすると、今度は何やらわけのわからない目くばせをした。次の瞬間、信平が立ちあがるのも見ずに、その小柄な丸い体をくるっと回転させ、いま出て来た廊下の方へ歩き出した。彼女の足は、信平が病人であることを完全に無視していた。途中、さっき駆けこんでいった受付の娘が、小声で何か歌いながらひきかえして来るのに出あった。

信平が連れて行かれた病室は、第二病棟の（といっても全部で二病棟しかないのだが）一番奥の部屋であった。八ベッドの大部屋で、窓側は中央に一ヵ所、廊下側は三ヵ所出入口があり、信平のベッドは廊下よりの内側、つまり、頭の方からも足の方からも出入出来る、便利だが少しうるさい位置にあった。

「ここよ。わからないことあったらきいてね。」

信平が、これから世話になる旨の挨拶をしようとしたときは、看護婦の姿はすでに、足音高く廊下の床板を踏み鳴らして遠ざかっていた。もっとも着いたばかりでは、まだ何がわからないのかがわからないのだから、彼女は大変適切な処理をしているわけであった。

「ここは外科病院でしたね。」

無口な木村の言葉に、信平はふりかえって笑った。

「びっくりしたでしょう。まったく乱暴ですからね。しかし、じきに馴れますよ。」

向い側の男が信平に声をかけた。今の看護婦が乱暴だというのか、この病院がという意味なのかわからなかったが、住み心地よさそうにベッドの上にあぐらをかいて、信平を見まもっているようすは、いかにも現在の生活に対して自信を持っているものの態度であった。その隣りのベッドで、ギターをかき鳴らしていた骸骨のようにやせた少年も、手を休めて信平に笑顔を向けた。

荷物の整理がすむと、すぐ木村は帰った。信平は玄関まで見送つてから、廊下の左側にある手術室の前で立ちどまった。入口の横の黒板に、二日後に手術を受ける人の氏名が書き出されてあった。肺切、第一成形、瘻閉鎖、補成、などという手術の種類らしい肩書きが、それぞれ氏名の上につけられていた。信平はふと、数日前に受けとった分厚い封筒のことを思い出した。それは、信平も知っている或る書店の社員が、今度独立してはじめた、黎明社という印刷ブローカー会社の営業案内であった。同僚三名が協力してつくった会社で、そのうちの一人が取締役社長、あとの二人がいずれも常務取締役という、全員ものものしい肩書きをつけた氏名が、終りに仲よくならべてあった。

信平は、一人笑いをおさえてひきあげようとしたとき、丁度その眞向いの壁にかけられた同じ寸法の黒板に、自分の名が書きとめてあるのを発見して驚いた。手術の掲示と思ったわけではな

いが、さっき〈毒液〉を見たときに感じたような怯えが、ふたたび甦えって来たのだった。

八月五日（日曜日）入院
（上切）　柳沢信平
（区切）　春川正治
（上切）　山村君子

それは、入退院患者の氏名を書き出す黒板であった。信平は、やがて同僚となるべき、春川正治と山村君子の名を、ここで確実に記憶した。

（上切）（区切）というのは、肺の切除範囲のことであろうが、ただ入院を知らせるだけの氏名にまで、わざわざこんな肩書きをつけてあることに、病院の不躾さというものが感じられて、信平は腹立たしくなった。子供のころ、はじめて一人で歯の治療に行ったとき、部屋の入口に〈患者室〉と書いてあるのを見て、〈囚人室〉と書いてあるような気がしたことがあったが、それ以来、信平は医者ぎらいになり、とくにその歯医者には終始敵意を感じたことを記憶している。丁度、そのときの憤懣に似た感情が、胸の中を満たして行くように思われた。

何とも、理屈にあわない不安におちいっていることに気づくと、信平は急に疲労感をおぼえ、早くその場から逃れたい衝動に駆られた。風があるのか、顔の高さあたりまでチョークの粉が舞いあがって、日なた臭いにおいが、鼻腔を襲うた。信平は呼吸をとめて歩き出した。——こいつを吸うと肺に悪い——

病室に帰つて体を横たえると、信平は快よい目まいをおぼえた。窓の外につき出したヘチマ棚の茂みを通して、傾斜した陽ざしが、まだつよい熱気を病室の中にしのびこませ、視界をさえぎって病棟をとりかこんだ深い林の中では、幾種類かの蟬がモザイクのように鳴きわけていた。信平は首をまわして室内をながめた。最近のことらしいが、窓わくには緑、腰板には白のペンキが塗られて、思いのほか明るい感じであった。しかも、その不調和な色彩が、不調和の故にかえって気のおけない安らぎをあたえるという効果をあげていた。事実、落書きこそしてないが、白い腰板には、大小さまざまな板きれがラジオや薬袋や花瓶などの置場として、遠慮もなく打ちつけてあり、出入口の両側にある緑の窓は、患者たちがそこへとまって、西瓜の種を吐き出す場所に使われていた。

信平が、少年のかき鳴らす何の音律もないギターの音に、聞くともなく耳を傾けていると、不意に、ピンクの派手なタオル地の寝巻き姿をした女の患者が、頭上の入口から、お尻をくねらせ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

てはいって来た。

「加島さん、ぴょんぴょんしましょう。」

「ああ。」

さっき信平に声をかけた男は、一度は気のない返事をしたが、すぐ思いなおしたように笑顔をつくって、書きかけていた葉書を裏にかえした。

「あら、かくすことないでしょう？　ホホ……ねえ、ぴょんぴょんしましょう。」

「しようのない人だ。」

加島六郎は、書きかけていた万年筆の蓋を、必要以上の丁寧さでしめ終ると、ベッドの下からダイヤモンドゲームの盤をとり出した。信平ははじめて見るゲームであった。敵味方にかかわりなく、一つずつ飛びこえて相手の陣地に自分の駒を収めてしまうだけの、至極簡単なルールであることが、見ているだけですぐ理解出来た。（駒が飛びこえて行くようすを形容して、ぴょんぴょんと言うらしかった。）

大分腕がちがうと見えて、胸に手を組んで考えこんだ霜山ひろ子を、加島は上から見下ろすようにながめながら、いかにも暇をつぶすのに苦労しているというようすであったが、ひろ子はそんな加島には頓着なく、ひたすら勝負の醍醐味にひたっていた。やせた体を前かがみにして駒を

うごかすたびに、胸と腰の間をしめたしごきをさかいに、タオル地につつまれた女体が、ゴムのように伸びたりちぢんだりした。

「ぴょんぴょん娘やっとるな……」

廊下から声をかけて、威勢よく入って来た青年があった。彼は、信平と視線があうと、

「や。」

と、まことに心やすい挨拶をした。それから加島のベッドに歩みより、ひろ子とならぶように片足をあげて坐りこんだ。二人の対戦をながめたその顔に、快心の笑みが浮びあがった。

「おいひろ子、おめえ何やってるんだ？　見ちゃおられないて、こりゃあきっとあともどりしていたんだな。」

「介さんたら！　黙っていらっしゃい。人が一生懸命になってるのに……」

「ほう！　ちょっと伺いますがね、一生懸命って、何を？……」

みんなと一緒に、ひろ子も吹き出したが、彼女はまた無心に腕ぐみして考えこんだ。いつのまにか加島のベッドをかこんでいた四五人の見物人たちも、介さんなる人物の出現によって、急に勢づいたように半畳を入れはじめた。

「いやんなっちゃうな……」

しばらくたって、ひろ子は敗北を認める嘆息をもらした。
「一人だって紳士がいないんだから……」
盗むような視線を信平に送りながら、ちらっと赤い舌を出した。
二回目もひろ子の大敗に終り、三回目はもっとひどい差がついた。四回目を彼女が挑戦したとき、加島は柔和な顔に苦笑を浮べて、自分の寝台をおりた。
「じゃ、介さん、あんたでもいいわ、しましょう。」
「でもいいわとは何ですか。その上こいつ、しましょう、とはまた何事ですか。え?……『お願いします』と言わなきゃいけないんじゃないの?」
「お願いします」と言うとき、介さんは腰をくねらせ、ひろ子のくせをたくみに眞似てみせた。
「ん、いやな人!……いいからはやくしましょう。」
「据膳食わぬは何とやら……一丁、やるかな。」
「いやらしい! この人たち、すぐあれだから。」
「ひろ子さんひろ子さん、この人たちって、その中に僕もはいるの?」
ギターの少年が口をはさんだ。
「知らない! 子供のくせに一人前のこと言って、何よ……あら、こちらにまで笑われちゃっ

た。」

信平は笑わなかったのだが、ひろ子にからまれると、何か言葉をかえす義務が生じたように思われた。とっさに、信平はひろ子がひとしをとりちがえていることを話題にのせた。

「ひらない、と聞えたものですから……」

「あら、ひらない、よ。」

ひろ子は抗議したが、わずかにしの音がまじっただけで、やはりひと発音した。

「いけませんかしら?……」

しばらくたってからも、ひろ子は、嫌疑が晴れぬ顔で信平を見た。

「いやいや、いけないってわけではありません。私の女房などは、日比谷をしびやと言うし、渋谷をひぶやって言ってますから、いいんでしょう。」

「あら、あたしもそうよ。」

「じゃ、君は、ひもやましろ子か?」

介さんこと北村儀介は、ひろ子を弥次りながら、余裕あり気にゲームを進めていたが、おかしなことに、勝負の結果は敗北に終った。

信平はひろ子とのやりとりがきっかけで、自然に患者たちの仲間入りをすることが出来た。そ

れから夕食までの短い時間であったが、ベッドをぴょんぴょんゲームに占領された加島から、信平は病院の規則や構成や習慣などのあらましを聞いた。必要なことを要領よく話したあと、加島は、自分は患者自治会の役員をしているから、どんなことでも不満や意見があれば遠慮なく持ち出してほしいということをつけくわえた。その話しぶりから、彼はこの病院に長くいることがわかったが、紅顔ともいえる血色のよい頬や、骨太の腕や、かなりの長身らしい体軀をしたこの男の、どこに結核菌が巣くっているのかと、信平にはいぶかしく思われた。

目覚し時計でも鳴らしているような、夕食を告げるベルの音が、廊下の端からひびいて来た。信平はいましがた加島に教わった通り、ぞろぞろと廊下に流れ出た患者や付添婦たちのあとにしたがって、食膳をとりに出かけた。つきあたりに、九尺幅の配膳台があって、誰でも自由にとれるように食膳がならべてあった。

「今宵もまた、じんましん料理か。」

「米の色って、黄色だったかね？」

「大盛り、大盛り！　おじさん出てないよ！」

あたりは雑踏していた。おちょぼ口をした女の患者が、一旦手にした食膳をもとにもどし、隣りの食膳と素早くとりかえてひきあげていった。信平はあたりに立ちこめたすえたようなにおい

の中で、すでに食欲をうしなっていたが、栄養を第一とする肺病患者の義務感から、量目の少なそうな一つをえらんで手にとった。ひきかえそうとして何気なく上を見ると、配膳台の上段の棚に、笠をかぶった大型の目覚し時計が鎮座していた。

夕食ののち、信平がベッドの上にころがって、窓の向う側に、一条二条たばこの煙がためらいがちに立ちのぼるのをながめたり、隣りの女患部屋から、鼻の中で風船をふくらますような伴奏ではじまる、〈愛ちゃんはお嫁入り〉という歌が聞えて来るのに耳をかたむけたりしているうちに、いつのまにか室内は食前にもましてにぎやかな情景を展開していた。儀介とひろ子がふたたびぴょんぴょんをはじめ、片方の隅では将棋、もう一方の隅では花札開帳と、次々にどこからか人が集って来て、ざわめきは次第に大きくなっていった。この信平たちの二十号室は、比較的元気な患者が多く、病棟の娯楽室の観を呈しているようであった。

突然、頭上を電車が走り去るような音を立てて、拡声機が叫び出した。

「柳沢さん！　柳沢さん！　大至急看護室まで来て下さい。」

信平は飛びあがってスリッパをつっかけた。しかし、考えてみると、今ここで大事件が勃発する理由は何もなかった。

「山田さんですよ、ほら、さっきあなたを案内して来た看護婦がいたでしょう。住所かなにかそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook